

《総合診療ボックス》

症状でみる子どものプライマリ・ケア

加藤 英治 著

橋本剛太郎

(はしもと小児科クリニック院長)

診療の腕を磨くうえで大切なことは2つ、経験例を振り返って吟味することと、教科書や文献に当たって軌道修正をすることである。しかし、この2つを不断に続けるのは難しい。経験例が多くても振り返りや読書が不十分だと、偏狭な「オレ流」に陥る。

福井県済生会病院小児科部長の加藤英治先生は、この不斷の努力を長年コツコツと続け、たわわに実った小児診療の果実を1冊にまとめた。この本は教科書ではない。診療の現場で気をつけること、診療の進め方考え方を改めて気づかせてくれる本である。

たとえば、「腹痛の診かた」の章では、病歴からどのように迫るか、診察からどのように迫るか、診断できない場合は？……と実際の診療に即して展開し、急性虫垂炎や腸重積症を見逃さないための、著者の経験に基づいたアドバイスが続く。急性虫垂炎の項では、自験例を集計して何をきっかけに診断に至ったかを丹念に分析している。他の章でも自験例の集計と分析が随所に見られ、著者の振り返りの姿勢には敬服するほかない。さらに教科書や文献から著者が得た膨大な知識のエッセンスが提示される。このように、経験と知識に裏打ちされた記述なので、読んでいると

重厚な迫力が感じられてくる。

複数の知人が「読んでいるうちにだんだん引き込まれて一気に読みしてしまう」と言う。これは内容が豊かで痛快だけでなく、著者の人柄が文章ににじみ出ているからだろう。よく食べ、よく飲み、よく話す、人の好いエネルギーな彼の文章からは、なんだか元気をもらえる。

写真の豊富さもこの本のメリットのひとつで、写真を眺めるだけでも多くを学べる。忙しい診療のなかでよくこれだけの写真を撮ったものだと感心する。実は、彼はもっともっと多くの貴重な写真を私蔵しているが、この本には載せ切れなかったのである。死蔵させるにはあまりに惜しいので、次は写真集を出版してもらえないものかと期待している。

参考書や文献のリストも豊富だが、その1つひとつに著者のコメントがついているのがある。この本はイラストが豊富、「家庭医向けだが研修医にもお勧め」など、読者がさらに学ぼうとするときの指標になる。単なる引用源を示したアリバイ証明のような参考文献リストとは一線を画するこの新しいスタイルを、これからの本は踏襲してほしいものだ。

この本は、学生・研修医に小児科医の心を教えてくれる。家庭医・内科医に小児診療の落とし穴を教えてくれる。ベテラン小児科医には知識と経験の整理を促してくれる。読んだ後の自分の診療がちょっと変わったな、と感じる好著である。M

● A5 頁 360 2010 年

定価 4,200 円(本体 4,000 円+税 5%)

[ISBN 978-4-260-01128-0] 医学書院刊